

縦型／横型—個人主義／集団主義の性差・地域差・年齢差について： 放送大学生の場合

大橋理枝¹⁾

Within-culture differences on horizontal/vertical- individualism/collectivism : An example of the University of the Air students

Rie OHASHI

ABSTRACT

Horizontal/Vertical-Individualism/Collectivism Scale (Singelis, Triandis, Bhawuk, & Gelfand, 1995) was administered to 350 students at the University of the Air. The results showed that the participants consistently scored higher on the two horizontal scales (i.e., the horizontal individualism scale and the horizontal collectivism scale) compared to the two vertical scales. The fact that the same result was obtained regardless of whether the participants were categorized by sex, metropolitan or non-metropolitan locations, or by their age range suggests that this may be a robust tendency among Japanese people. Differences between males and females were detected in vertical individualism scale and horizontal individualism scale, whereas differences between various age ranges were detected in horizontal collectivism scale. In vertical collectivism scale, differences between males and females as well as differences between various age ranges were detected. No differences were found between participants of metropolitan and non-metropolitan locations in any of the four scales. An interaction between metropolitan/non-metropolitan locations and age range was found in horizontal individualism scale, whereas an interaction between male/female and age range was found in horizontal collectivism scale. The result that the participants scored higher on the two horizontal scales is similar to the findings from previous studies conducted with the same scale items and different participants, thereby casting doubts again on the taken-for-granted notion of Japan as a collectivistic society.

要旨

放送大学の学生350名に、横型／縦型—個人主義／集団主義尺度 (Singelis, Triandis, Bhawuk, & Gelfand, 1995) に回答して頂き、その結果を分析したところ、横型個人主義尺度及び横型集団主義尺度の得点が高く、縦型個人主義尺度及び縦型集団主義尺度の得点が低いことが分かった。データを、性別、調査実施学習センターが南関東であるか否か、及び年齢層別で分けて比較したところ、いずれの場合も同様の結果が出たことから、この傾向はかなり安定したものなのではないかと推測された。尺度別に主効果をみると、縦型個人主義尺度及び横型個人主義尺度では男女差が、横型集団主義尺度では年齢層による差が、縦型集団主義尺度では男女差及び年齢層による差が、あることが分かった。学習センター所在地が南関東であるかそれ以外の地域であるかによる差はいずれの尺度においてもみられなかった。また、交互作用としては、横型個人主義尺度の得点は学習センター所在地が南関東であるかそれ以外の地域であるかによって年齢層ごとの得点の傾向が異なり、横型集団主義尺度の得点は男性と女性との間で年齢層ごとに得点の傾向が異なることが分かった。全体を通して横型個人主義尺度及び横型集団主義尺度の得点が高く、縦型個人主義尺度及び縦型集団主義尺度の得点が低いということは、これまでに行われた異なる調査協力者に対して同じ質問項目を用いて行った調査の結果とも類似しており、今回の結果もこれまで言われてきた日本社会の集団主義性に対して疑問を投げかけるものとなった。

¹⁾ 放送大学助教授 (「人間の探究」専攻)

1. はじめに

集団が持っている目標や都合より個人の目標や都合を優先する価値観（例えば、会社で残業を頼まれても先約があるからといって断るなど）のことを「個人主義 (individualism)」といい、個人の目標や都合よりも集団の目標や都合を優先させる価値観（例えば、家族との約束があったのに残業を頼まれたら家族との約束の方を反故にするなど）のことを「集団主義 (collectivism)」というが、この個人主義／集団主義という概念は、異文化間コミュニケーションの分野では文化の違いを説明する際に最も頻繁に使われる概念の一つである (Gudykunst & Nishida, 1994; 桜木, 1997など)。ホフステードは、1980年代初頭に行った50カ国と3つの地域における幾度かの調査で、人々が持っている勤労に対する価値観を、「権力格差の容認 (power distance)」「不確実性の回避 (uncertainty avoidance)」「男性的価値／女性的価値 (masculinity/femininity)」そして「個人主義／集団主義」という4つの軸に集約した (守崎, 2000) が、中でも個人主義・集団主義はその後も研究者の注目を集め続けてきた。

ホフステードの提示した「個人主義／集団主義」の概念は、文化レベルの変数 (複数の文化の間の違いを比較するための変数) として考えられていたが、その後日米二国間の比較を行う際にもこの概念が用いられるようになり、個人変数 (個人間の違いを比較するための変数) として扱われるようになった。それに伴い、生みの親本人であるTriandis, Leung, Villareal, & Clack (1995) が「個人主義／集団主義の個人版」であると宣言している「他者中心／自己中心 (allocentrism/ideocentrism)」の考え方や、1990年代になって提唱された「自／他関係規定 (independent/interdependent self-construal)」 (Markus & Kitayama, 1991) などが現れるようになった。更に1990年代半ばになると、Triandis (1995) が従来の「個人主義／集団主義」の軸に「権力差／平等」という軸を交差させたものとして「横型／縦型－個人主義／集団主義 (horizontal/vertical-individualism/collectivism)」の概念を提唱し、個人間の権力差を容認する個人主義の考え方を「縦型個人主義 (vertical individualism)」、個人主義ではありながらも個人間の平等を重んじる考え方を「横型個人主義 (horizontal individualism)」、個人間の権力差があることを前提にした集団主義の考え方を「縦型集団主義 (vertical collectivism)」、個人間の平等を重んじた集団主義の考え方を「横型集団主義 (horizontal collectivism)」とした。Singelis, Triandis, Bhawuk and Gelfand (1995) がTriandisのこの概念に基づいて作成した横型／縦型－個人主義／集団主義の尺度は、その後も幾つかの研究でも使われているようである (Koerner & Fujiwara, 2000; Nelson & Shavitt, 2002; Parkes, Schneider, & Bochner, 1999; Saunders & Munro, 2001; Triandis & Gelfand, 1998; Tupchiy & Hornik,

2002; Yoo, 2001)。

この間に、異文化間コミュニケーションの分野では日米の文化比較研究が数多く行われてきた。その結果「多くの研究者達が、アメリカは個人主義的な文化であり、日本は集団主義的な文化であるという点で合意している」 (Gudykunst & Nishida, 1994: 訳は筆者) とされ、このことは異文化間コミュニケーションの分野では既に「了解」されたことになっていた。しかしながら、その後この分野の研究が更に蓄積されていくにつれて、それまで個人主義的価値観が主流だと思われていたアメリカ人の被験者よりも、日本人の被験者の方が個人主義度の尺度の得点が高いという事象が度々見られるようになった (Gudykunst et al., 1996; Kim et al., 1996; Oetzel, 1998; Ohashi, 2001)、大橋 (2004) など。その際、これまでの多くの研究が日米の被験者から同じ質問紙に対する回答を集めて比較するという形で成されていたため、この「予想外」の事態の原因は日米の大学生を被験者としていたことに求められた。つまり、大学生はまだ成人した社会の一員では無いが故に、日本の社会の中に浸透している集団主義的価値観を十分に身につけていないと考えられ、逆に高校生時の受験一辺倒の生活から開放された大学生の時期が日本人の一生の中で最も個人主義的価値観が表立っている時期である為に、同輩のアメリカ人よりかえって個人主義的な価値を標榜しているような結果になる (即ち個人主義尺度の得点が高くなる) のではないか、という論理である (Triandis & Gelfand, 1998)。しかしながら、日米の大学生及びその親から同じ質問に対する回答を得ることで世代差の有無を検証することを試みた大橋 (2004) でも、日本の親世代の方が子世代より横型集団主義尺度の得点が低かったという結果が出ており、上記の論理 (日本の大学生はまだ日本社会の集団主義的価値観を身につけていないので個人主義尺度の得点が高いのだとする論) が必ずしも正しいとは限らないことが示唆されている。

また、大学生同士を比べた調査結果がどこまで一般化できるのかという指摘もこれまでに成されている。例えば都心部の大学生を被験者として調査を行った結果を地方の日常生活にまで一般化できるのか、という疑問である。これは日本についてもアメリカについても同じことがいえるが、それぞれの国内での地域差や都市部と農村部との差などについてはこれまで殆ど研究されていない。

そこで、今回の調査では、放送大学の学生の方々に調査にご協力頂き、様々な地域の、様々な年齢の方々から同じ質問票に対する回答を頂くことで、日本国内での地域差や年齢差はどの程度あるのか、という点を検証し、大橋 (2004) で行った世代差の検証に引き続き、文化内差 (within-culture variation) の問題に焦点を当てることを目的とした。

2. 調査方法及び尺度項目の決定

2005年2月から2006年8月にかけて、「異文化間コ

コミュニケーション入門」及び「文化とコミュニケーション」の面接授業時（いずれも集中型又は土日型で、連続する二日間での授業）に、同意書と共にアンケートを配布し、回答はあくまで自主的なものであることを強調して協力を依頼した。授業の一日目にアンケートを配布した場合は翌日提出して頂いた。授業の二日目にアンケートを配布した場合は最終コマに配布し、その場で回答して頂くか、回答済みのものを後日郵送して下さるようお願いした¹。アンケートには、縦型／横型—個人主義／集団主義尺度の4つの尺度に属する項目をランダムな順序で配列した部分が含まれており、その他にも別の尺度に関する質問や回答者自身のことに関する簡単な質問も含まれていた。全350名の調査協力者の概要は付録1に掲載してある。

縦型／横型—個人主義／集団主義尺度は、Shingelis, Triandis, & Gelfand (1995) の尺度を和訳したものを使用した²（リカート式、7件法）。もとの尺度は縦型個人主義、縦型集団主義、横型個人主義、横型集団主義の各尺度に8項目ずつあるが、それらが必ずしも全て同じ概念を測っているとは考えられないため、各尺度の一因子性を確保するために探索的因子分析を行った。今回の調査協力者全員のデータを用いて各尺度をそれぞれ因子分析にかけ、主因子法で抽出された第1因子に.40以上の負荷を持ち、かつ第2因子の負荷との差が.10以上あるものを今回使用する尺度項目として採用し、そのようにして選んだ項目のみを使って再度因子分析を行って一因子性を確認し、尺度の項目を最終決定すると共に、最尤法で因子構造の適合度検定を行った。また、そのようにして決定した尺度項目から成る各尺度の信頼度係数を算出した。今回採用した尺度項目の因子負荷量及び各尺度の信頼度係数と適合度検定の結果は、付録2に掲載してある³。それぞれの尺度ごとに採用する項目数が異なるため、それぞれの尺度について、尺度項目の合計得点を項目数で割ったものをその尺度の得点とし、この尺度得点を使って分析を行った。

3. 結果

今回の調査協力者全員の各尺度についての平均値、及び、協力者を性別、学習センター所在地⁴、年齢層⁵に応じて分けた際のそれぞれの平均値を表1に示した。興味深いのは、どのグループでも横型の二つの尺度の得点の方が高く、縦型の二つの尺度の得点の方が低いことである。更には、その両者の間にはかなりはっきりと差が見られることも特徴として挙げられよう。例えば、各尺度について全員分の平均を見てみると、一番得点が高いのが横型個人主義（ $N=339$ 、 $M=5.198$ 、 $SD=0.866$ ）、二番目に高いのが横型集団主義（ $N=338$ 、 $M=5.083$ 、 $SD=0.786$ ）だが、この両者の点差は0.115と僅かである。また、一番低い点だったのが縦型集団主義（ $N=336$ 、 $M=4.116$ 、 $SD=0.902$ ）、下から二番目だったのが縦型個人主義尺度（ $N=337$ 、 $M=4.151$ 、 $SD=0.953$ ）で、この差も僅か0.035である。ところが、

二番目に高かった横型集団主義の得点と三番目に高かった縦型個人主義の得点の差は0.932と大きい。同様のことが、他の全てのグループについても言え、両者の間の差は統計的に有意である。（表2）。従って、縦型の尺度の得点の方が横型の尺度の得点よりも高いという傾向は日本人の中では比較的安定しているのではないだろうかということが推測できる。

次に、男女差、学習センターの所在地が南関東であるかそれ以外であるかの違いから生じる差、及び年齢層間の主効果を検証した。T検定を行った結果、縦型個人主義尺度、縦型集団主義尺度、及び横型個人主義尺度で男女間に有意差が見られた。いずれも男性の方が女性より得点が高い結果となった（表3）。一方、学習センターの所在地が南関東であるかそれ以外であるかの違いから生じる有意差はみられなかった。また、一元配置分析を行った結果、縦型集団主義と横型集団主義で年齢層による違いが見られた。どちらも年齢が上がるにつれて尺度の得点が高くなる傾向があることが分かった（表4）。

最後に、男女差、学習センターの所在地が南関東であるかそれ以外であるかの違いから生じる差、及び年齢層間の差の中で、交互作用が見られるものがあるか否かを検証した。その結果、横型個人主義尺の年齢層別の得点の傾向が、学習センター所在地が南関東であるか否かで異なっていることと、横型集団主義の年齢層別の得点の傾向が男女間で異なっていることが分かった（表5）。横型個人主義の得点に関しては、南関東の場合、18歳から45歳までが一貫して比較的高く、46歳以上では下がっているが、南関東以外の場合、18～35歳の得点が低く、46～55歳の方々の得点が一番高く、56歳以上でまた下がるという、逆V字のパターンになっているところが大きく異なることが分かった（表5-1グラフ参照）。また、横型集団主義尺度の得点に関しては、女性の場合は18～35歳が一番低く、次の年齢層である36～45歳で一度高くなるも、46～55歳でまた得点の下がり、55～65歳でまた高くなってピークを迎え、65歳以上でまた下がる、という、二山のパターンになっているのに対し、男性の場合は18～35歳時の得点から下がっていき、36～45歳の得点が一番低く、その後は年齢層が上がるにつれて得点も高くなるという、一度谷に落ちてから上昇、というパターンになっており、この両者が大きく異なっていることが分かった（表5-2グラフ参照）。

なお、男女差、学習センターの所在地が南関東であるかそれ以外であるかの違いから生じる差、及び年齢層間の差の三者の交互作用の検証は、セル当りの人数がかなり少なくなってしまうことに鑑みて差し控えざるを得なかった。

4. 考察及び結論

今回の調査結果で地域差や年齢層の差による違いが余りみられなかったことは予想外であった。これまでの異文化間コミュニケーションの分野における数多く

表1 各尺度の平均得点

(平均値の前の数値はそのグループの各尺度の平均値の高い順を表す)

		縦型個人主義尺度			縦型集団主義尺度			横型個人主義尺度			横型集団主義尺度		
		N	M	SD									
全体		337	③ 4.151	0.953	336	④ 4.116	0.902	339	① 5.198	0.866	338	② 5.083	0.786
性別	女性	208	④ 3.990	0.974	207	③ 4.027	0.917	207	② 5.126	0.944	207	① 5.131	0.771
	男性	119	③ 4.432	0.847	119	④ 4.254	0.841	120	① 5.311	0.707	119	② 5.025	0.811
所在地	南関東	180	③ 4.233	0.967	180	④ 4.150	0.916	180	① 5.231	0.844	181	② 5.055	0.839
	南関東以外	157	④ 4.056	0.931	156	③ 4.077	0.886	159	① 5.160	0.890	157	② 5.114	0.721
年齢層	18~35歳	64	③ 4.153	0.898	64	④ 3.941	0.841	65	① 5.154	0.993	64	② 4.925	0.977
	36~45歳	62	③ 3.952	1.059	62	④ 3.940	0.892	61	① 5.233	0.880	61	② 4.970	0.851
	46~55歳	83	③ 4.116	0.812	82	④ 3.973	0.959	83	① 5.270	0.907	83	② 5.026	0.719
	56~65歳	87	④ 4.267	0.932	87	③ 4.333	0.813	88	② 5.193	0.765	87	① 5.354	0.630
	66歳以上	32	④ 4.281	1.164	32	③ 4.563	0.818	32	② 5.069	0.723	32	① 5.453	0.575

表2 各グループにつき、2番目に高かった得点の尺度と3番目に高かった得点の尺度の平均点の差

(表1と平均点などが異なっているのは欠損値などを除いて計算してあるため)

		N	M	SD	SE	対応のある2群の差の検定							
						t	df	p	平均値の差	標準偏差	平均値差の標準誤差	差の95%信頼	
全体	縦型個人主義	336	4.149	0.954	0.052	-13.867	335	.000	-0.936	1.237	0.068	-1.069 ≤ α ≤ -0.803	
	横型集団主義	336	5.085	0.787	0.043								
性別	女性	縦型集団主義	206	4.027	0.919	0.064	-11.015	205	.000	-1.093	1.424	0.099	-1.288 ≤ α ≤ -0.897
		横型個人主義	206	5.119	0.942	0.066							
	男性	縦型個人主義	119	4.432	0.847	0.078	-6.371	118	.000	-0.593	1.016	0.093	-0.778 ≤ α ≤ -0.409
		横型集団主義	119	5.025	0.811	0.0743							
所在地	南関東	縦型個人主義	180	4.233	0.967	0.072	-8.706	179	.000	-0.825	1.271	0.095	-1.012 ≤ α ≤ -0.638
		横型集団主義	180	5.058	0.840	0.063							
	南関東以外	縦型集団主義	155	4.073	0.888	0.071	-13.059	154	.000	-1.050	1.001	0.080	-1.209 ≤ α ≤ -0.891
		横型個人主義	155	5.123	0.720	0.058							
年齢層	18~35歳	縦型個人主義	64	4.153	0.898	0.112	-4.438	63	.000	-0.771	1.390	0.174	-1.119 ≤ α ≤ -0.424
		横型集団主義	64	4.925	0.977	0.122							
	36~45歳	縦型個人主義	61	3.938	1.062	0.136	-6.037	60	.000	-1.032	1.335	0.171	-1.374 ≤ α ≤ -0.690
		横型集団主義	61	4.970	0.851	0.109							
	46~55歳	縦型個人主義	83	4.116	0.812	0.089	-7.607	82	.000	-0.910	1.090	0.120	-1.149 ≤ α ≤ -0.672
		横型集団主義	83	5.026	0.719	0.079							
	56~65歳	縦型集団主義	87	4.333	0.813	0.087	-6.385	86	.000	-0.853	1.246	0.134	-1.118 ≤ α ≤ -0.587
		横型個人主義	87	5.186	0.767	0.082							
66歳以上	縦型集団主義	32	4.563	0.818	0.145	-2.517	31	.017	-0.506	1.138	0.201	-0.917 ≤ α ≤ -0.096	
	横型個人主義	32	5.069	0.723	0.128								

表3 男女による違い

		N	M	SD	SE	等分散性検定 (Levine)		t検定					
						F	p	t	df	p	平均値の差	平均値差の標準誤差	差の95%信頼区間
縦型個人主義	女性	208	3.990	.974	.068	2.344	.127	-4.130	325	.000	-.442	.107	-.652 ≤ α ≤ -.231
	男性	119	4.431	.847	.078	よって等分散を仮定する							
縦型集団主義	女性	207	4.027	.917	.063	.645	.423	-2.223	324	.027	-.228	.102	-.429 ≤ α ≤ -.026
	男性	119	4.254	.841	.077	よって等分散を仮定する							
横型個人主義	女性	207	5.126	.944	.066	10.884	.001	-2.022	304.3	.044	-.186	.092	-.367 ≤ α ≤ -.005
	男性	120	5.311	.707	.065	よって等分散を仮定しない							

の研究結果で、様々な側面に男女差があることは知られており、この点はいわば予め予想していたことであった。しかしながら、これまで度々言及されていた日本国内の地域差や年齢層による差などは、この調査の

結果を見る限り余り無いのではないかとと思われる。今回の調査は、大学生に対して行った調査の結果をどこまで一般化できるのかという問題に関しては、少なくとも地域差や年齢層差に関しては余り神経質にならず

表4 年齢による違い

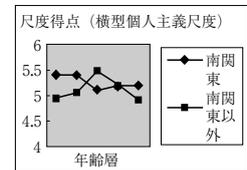
		N	M	SD	SS			df			MS		F	p
					グループ間	グループ内	合計	グループ間	グループ内	合計	グループ間	グループ内		
縦型 集団 主義	18～35歳	64	3.941	0.841	16.057	245.263	261.319	4	322	326	4.014	0.762	5.270	.000
	36～45歳	62	3.940	0.892										
	46～55歳	82	3.973	0.959										
	56～65歳	87	4.333	0.813										
	66歳以上	32	4.563	0.818										
横型 集団 主義	18～35歳	64	4.920	0.977	9.531	190.277	199.808	4	322	326	2.383	.591	4.032	.003
	36～45歳	61	4.970	0.851										
	46～55歳	83	5.026	0.719										
	56～65歳	87	5.250	0.630										
	66歳以上	32	5.450	0.575										

表5 交互作用があった尺度

5-1. 横型個人主義尺度

		N	M	SD
南 関 東	18～35歳	31	5.400	1.089
	36～45歳	31	5.413	0.780
	46～55歳	44	5.100	0.783
	56～65歳	49	5.184	0.755
	66歳以上	19	5.190	0.793
南 関 東 以 外	18～35歳	34	4.929	0.851
	36～45歳	30	5.047	0.951
	46～55歳	39	5.462	1.005
	56～65歳	39	5.205	0.787
	66歳以上	13	4.892	0.592

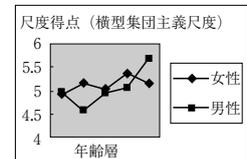
分散分析		SS	df	MS	F	p
主効果	年齢層	1.457	4	0.364	0.494	.740
	所在地	1.606	1	1.606	2.178	.141
2次交互作用	年齢層×所在地	8.328	4	2.082	2.824	.025
モデル		10.195	9	1.133	1.537	.134
残差		235.165	319	0.737		
合計		245.360	328	0.748		



5-2. 横型集団主義尺度

		N	M	SD
女 性	18～35歳	36	4.903	1.063
	36～45歳	42	5.159	0.718
	46～55歳	59	5.037	0.709
	56～65歳	54	5.395	0.607
	66歳以上	14	5.155	0.601
男 性	18～35歳	28	4.952	0.871
	36～45歳	19	4.553	0.988
	46～55歳	22	4.955	0.768
	56～65歳	31	5.054	0.615
	66歳以上	18	5.685	0.442

分散分析		SS	df	MS	F	p
主効果	年齢層	9.762	4	2.440	4.263	.002
	所在地	0.532	1	0.532	0.929	.336
2次交互作用	年齢層×所在地	7.789	4	1.947	4.401	.010
モデル		19.523	9	2.169	3.789	.000
残差		179.196	313	0.573		
合計		198.719	322	0.617		



に全体の傾向を述べるができるのではないかと
いう根拠になり得る結果であると思われる。但し、今回の調査協力者の多くが主婦を含め何らかの職業に従事している方々であり、所謂「日本の社会規範を身につけた人々」であったため、学生と社会人との違いの有無までは検証できなかった。この点は今後の検証課題として残る。

一方、今回の調査結果でも、日本人は必ずしも個人主義尺度の得点より集団主義尺度の得点の方が高いとはいえない、という結果が出たことは注目に値する。更には、どのグループでも縦型の尺度の得点より横型の尺度の得点の方が高かった点が一致していることは興味深い。大橋（2004）やOhashi（2001）でも同様の傾向が見て取れる（表6）ことを考えると、この傾向はある程度一貫しているといえるのではないかと

われる。これだけ異なる調査協力者からの結果でも、更には尺度に使用している項目さえ異なっても、共通性のある結果が出ているということから、日本は本当に集団主義的なのか？という点を再度問い直す必要があるのではないと思われる。少なくとも、この尺度で測る限り、日本は「横型社会」であるとは言っても「集団主義社会」であるとはいえない。これが尺度の問題なのか、「集団主義」や「横型」の概念化の問題なのか、これまでの研究では判然としないが、今後の研究結果の積み重ねに期待したい。

今回放送大学の学生さん方にご協力を頂いたことは、従来行われてきた大学生を対象とした調査とは異なる調査対象を用いての研究になったことを意味する。守崎（2000）でも、これまでの研究の被験者の偏りに関する問題点が指摘されているが、この指摘に対

表6 大橋(2005)及びOhashi(2001)との比較

		縦型個人主義尺度		縦型集団主義尺度		横型個人主義尺度		横型集団主義尺度	
		N	M	N	M	N	M	N	M
尺度 得点	今回	337	4.15	336	4.12	339	5.20	338	5.08
	大橋(2004)	87	4.01	88	4.19	86	4.48	87	4.61
	Ohashi(2001)	211	4.16	210	4.01	209	5.11	210	4.93
尺度 項目	今回	VI2, VI4, VI5, VI6, VI7		VC1, VC2, VC6, VC8		HI1, HI2, HI4, HI5, HI8		HC1, HC2, HC4, HC5, HC6, HC7	
	大橋(2004)	VI3, VI4, VI5, VI6		VC1, VC2, VC3, VC4, VC8		HI1, HI3, HI5, HI7, HI8		HC1, HC2, HC4, HC5, HC6, HC8	
	Ohashi(2001)	VI2, VI4, VI5, VI8		VC1, VC2, VC3, VC7		HI1, HI2, HI4, HI6, HI7, HI8		HC1, HC2, HC6, HC8	
調査 協力 者	今回	放送大学学生(年齢幅:18~85歳/男性122名、女性211名、不明17名)							
	大橋(2004)	東海大学学生及びその親(年齢幅:18~60歳/男性31名、女性56名、不明2名)							
	Ohashi(2001)	立教大学学生(平均年齢18.92歳/男性120名、女性98名、不明5名)							

する一つの答えを提示することができたという意味では、非常に貴重なデータをういた研究であったといえよう。放送大学生の個人主義/集団主義の意識が、他の日本人の個人主義/集団主義の意識とどの程度一致するのか違うのかは厳密に統計的な検証はできないながら、今回両者に同様の傾向があることが分かったことは、今後この分野の研究を行う上で意義のある示唆であったと言えるであろう。

注

- 1 授業時間終了時刻を過ぎてからも教室に残って調査にご協力下さった方々、及び、御自身の空き時間を使って調査にご協力下さった授業履修者の方々に、深く御礼申し上げます。
- 2 この日本語版「縦型/横型—個人主義/集団主義尺度」は筆者の博士論文執筆の際に使用したものである。
- 3 縦型集団主義尺度の信頼度係数及び適合度検定の結果が他と比べて悪いことに注意が必要である。

- 4 学習センター所在地は筆者が面接授業を行った学習センターのうち、文京・埼玉・世田谷を「南関東」とし、鳥根・福岡・富山・茨城・岐阜・熊本を「南関東以外」としたものである。調査協力者の居住地の目安にはなるが、他学習センター所属の履修者もいることを考えれば厳密な意味で調査協力者の生活圏を反映するものではない。
- 5 調査協力者の人数比を考慮して、18~35歳、36~45歳、46~55歳、56~65歳、66歳以上、という区分を立てた(46~55歳と56~65歳の調査協力者が同程度に多く、分割することは不適當であると判断したため)。
- 6 項目採用の基準は、1) 第一因子に.40以上の値を有すること、及び、2) 第二因子との差が.10以上あること。

付録1 調査協力者350名の概要

性別		調査を行った学習センター			
男性	122名 (35%)	文京	(2005年2月) 34名 (9.7%)	南関東(文京・埼玉・世田谷)	185名 (53%)
女性	211名 (60%)	鳥根	(2005年2月) 23名 (6.6%)		
無回答	17名 (5%)	福岡	(2005年4月) 46名 (13.1%)		
		富山	(2005年8月) 18名 (5.1%)		
		埼玉	(2005年8月) 81名 (23.1%)		
		茨城	(2005年10月) 37名 (10.6%)		
		岐阜	(2005年12月) 28名 (8.0%)		
		世田谷	(2006年2月) 70名 (20.0%)		
		熊本	(2006年8月) 13名 (3.7%)		
年齢		専攻		職業	
18~25歳	15名 (4.3%)	生活と福祉	47名 (15.9%)	公務員	16名 (4.6%)
26~35歳	50名 (14.3%)	発達と教育	76名 (21.7%)	会社員	65名 (18.6%)
36~45歳	62名 (17.7%)	社会と経済	46名 (13.1%)	教員・学校関係者	13名 (3.7%)
46~55歳	86名 (24.6%)	社会と経済	46名 (13.1%)	看護師・医療関係業種	27名 (7.7%)
56~65歳	89名 (25.4%)	産業と技術	10名 (2.9%)	その他(自営業・学生・団体職員・不明など)	53名 (15.1%)
66~75歳	27名 (7.7%)	人間の探究	80名 (22.9%)	主婦	56名 (16.0%)
76~85歳	6名 (1.7%)	自然の理解	5名 (1.4%)	アルバイト・パート	16名 (4.6%)
		選科生・科目生	5名 (1.4%)	無職	72名 (20.6%)
		不明	27名 (7.7%)	無回答	32名 (9.1%)
		無回答	54名 (15.4%)		
文化背景					
日本人	322名 (92%)				
在日韓国人	3名 (0.9%)				
在日中国人	1名 (0.3%)				
その他	11名 (3.1%)				
無回答	13名 (3.7%)				

付録2 各尺度の因子分析結果と採用項目

縦型／横型—個人主義／集団主義尺度

以下の部分は、あなたの考え方や行動の傾向に関する質問です。あなた自身の考え方や行動は、各文に書いてある内容との程度近いですか？あなた自身が個人的にどう考えるか、どう行動するかに従って答えて下さい。

縦型個人主義尺度

項目	因子分析結果 ^{a)}		採用	一因子時 ^{b)}
	因子1	因子2		
他人が自分よりうまく物事をこなすと腹が立つ。[VI1]	.509	-.694	×	
競争は自然の摂理である。[VI2]	.500	.304	○	.606
他の人が自分よりうまくやると、イライラしたりピリピリしたりする。[VI3]	.552	-.583	×	
競争がなければいい社会はできない。[VI4]	.476	.367	○	.620
勝つことが全てである。[VI5]	.628	.190	○	.601
他人よりうまく自分の仕事をやるのが重要である。[VI6]	.506	.093	○	.488
他人との競争があるところで仕事をするのは好きだ。[VI7]	.531	.295	○	.594
勝つことが大事だと強調する人もいるが、自分はそうではない。[VI8]〈反転項目〉	.282	.089	×	

5項目採用後の信頼係数 $\alpha = .72$ 適合度検定： $\chi^2 = 23.623$, $df = 5$, $p = .000$

縦型集団主義尺度

項目	因子分析結果		採用	一因子時
	因子1	因子2		
自分が好きなことでも、もし家族から反対されたらあきらめる。[VC1]	.441	-.302	○	.401
家族が喜ぶことなら、自分がやりたくないことでもする。[VC2]	.547	.022	○	.519
大きな旅行に行く前には、家族の大部分の人や、友人の多くに相談する。[VC3]	.359	-.145	×	
大抵、仲間の利益の為になら自分の利益を犠牲にする。[VC4]	.344	-.027	×	
子供は、自分の楽しみより義務を優先させるべきだということを覚えるべきである。[VC5]	.393	-.074	×	
仲間と意見が合わないのは嫌だ。[VC6]	.405	-.034	○	.426
年老いた親は自分の家で世話するべきだ。[VC7]	.331	.315	×	.492
もし親が何か名誉な賞を受賞したら、子供はそのことを名誉に思うべきである。[VC8]	.492	.247	○	

4項目採用後の信頼係数 $\alpha = .51$ 適合度検定： $\chi^2 = 3.082$, $df = 2$, $p = .214$

横型個人主義尺度

項目	因子分析結果			採用	一因子時
	因子1	因子2	因子3		
普段、「我が道を行く」ことが多い。[HI1]	.570	-.017	.050	○	.585
他人から自立した人生を生きるべきである。[HI2]	.508	.395	-.211	○	.365
自分のプライバシーを保つのが好きだ。[HI3]	.257	.310	.521	×	
人と議論するときは率直にものを言いたい。[HI4]	.434	.037	-.142	○	.425
自分は個性的な人間である。[HI5]	.706	-.437	.156	○	.708
自分がどうなるかは自分の行動次第である。[HI6]	.382	.128	-.208	×	
自分の成功は大抵、自分の能力による。[HI7]	.317	.238	.054	×	
多くの面で、他人とは違う独自性をもっていることが好きだ。[HI8]	.649	-.158	-.064	○	.682

5項目採用後の信頼係数 $\alpha = .69$ 適合度検定： $\chi^2 = 23.626$, $df = 5$, $p = .000$

横型集団主義尺度

項目	因子分析結果		採用	一因子時
	因子1	因子2		
自分の同僚が幸せなことは、自分にとって大切なことである。[HC1]	.737	-.467	○	.685
もし同僚が賞をもらったら、自分も誇りに思う。[HC2]	.636	-.153	○	.653
もし親戚の誰かが金に困っていたら、自分のできる範囲で援助する。[HC3]	.188	.074	×	
仲間の和を保つことは自分にとって大切なことである。[HC4]	.479	.134	○	.483
ちょっとしたものをご近所と分け合うのが好きだ。[HC5]	.470	.218	○	.443
他人と協力すると気分がいい。[HC6]	.700	.312	○	.653
自分の幸せは自分の周りにいる人たちの幸せによるところが大きい。[HC7]	.559	-.035	○	.585
自分にとっての楽しみとは、他人と共に時を過ごすことである。[HC8]	.383	.163	×	

6項目採用後の信頼係数 $\alpha = .74$ 適合度検定： $\chi^2 = 53.76$, $df = 9$, $p = .000$

a) いずれも主因子法による。

b) いずれも最尤法による。

参考文献

<和文>

- 大橋理枝 (2004) 「日本人・アメリカ人の縦型／横型－個人主義／集団主義：日米差と世代差について」放送大学研究年報 第22号 101-110.
- 桜木俊行 (1997) 「個人主義と集団主義」石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔 (編) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書 p.241.
- 守崎誠一 (2000) 「価値観」西田ひろ子 (編) 『異文化間コミュニケーション入門』創元社 p.132-181.

<英文>

- Gudykunst, W. B., Matsumoto, Y., Ting-Toomey, S., Nishida, T., Kim, K., & Heyman, S. (1996). The influence of cultural individualism-collectivism, self construals, and individual values on communication styles across cultures. *Human Communication Research, 22*, 510-543.
- Gudykunst, W. B., & Nishida, T. (1994). *Bridging Japanese/North American differences*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Kim, M.-S., Hunter, J. E., Miyahara, A., Horvath, A.-M., Bresnahan, M. J., & Yoon, H.-J. (1996). Individual - vs. culture-level dimensions of individualism and collectivism: Effects on preferred conversational styles. *Communication Monographs, 63*, 29-49.
- Koerner, A. F., & Fujiwara, M., (November, 2000). Relational models and horizontal and vertical individualism/collectivism; A cross-cultural comparison of Americans and Japanese. Paper presented at the 86th annual convention of the National Communication Association in Seattle, WA.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review, 98*, 224-253.
- Nelson, M. R., & Shavitt, S. (2002). Horizontal and vertical individualism and achievement values: A multimethod examination of Denmark and the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 33*(5), 439-458.
- Oetzel, J. G. (1998). Explaining individual communication process in homogeneous and heterogeneous groups through individualism-collectivism and self-construal. *Human Communication Research, 25*, 202-224.
- Ohashi, R. (2001). The Differences between U.S. Americans and Japanese on Independent/Interdependent Self-Construal and Horizontal/Vertical Individualism/Collectivism. 『言語情報科学研究』第6号 21-44.
- Parkes, L.P., Schneider, S. K., & Bochner, S. (1999). Individualism-collectivism and self-concept: Social or contextual? *Asian Journal of Social Psychology, 2*, 367-383.
- Saunders, S., & Munro, D. (2001). An exploratory look at Fromm's marketing character and individualism/collectivism. *Social Behavior and Personality, 29*(2), 153-157.
- Singelis, T. M., Triandis, H. C., Bhawuk, D. P. S., & Gelfand, M. J. (1995). Horizontal and vertical dimensions of individualism and collectivism: A theoretical and measurement refinement. *Cross-Cultural Research, 29*, 240-275.
- Triandis, H.C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press
- Triandis, H. C., & Gelfand, M. J. (1998). Converging measurement of horizontal and vertical individualism and collectivism. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 118-128.
- Triandis, H. C., Leung, K., Villareal, M. J., & Clack, F. L. (1985). Allocentric versus ideocentric tendencies: Convergent and discriminant validation. *Journal of Research in Personality, 19*, 395-415.
- Tupchiy, A., & Hornik, S. (February, 2004). Toward an explanation of an individual's culture on learning outcomes in a distance education. Proceedings of the 7th annual conference of the Southern Association for Information Systems, 264-269.
- Yoo, S-K. (2001). The cultural impact on depression expression and attitudes toward seeking professional help: A comparative study of Americans and South Koreans. *Asia Pacific Education Review, 2*(1), 94-100.

(平成18年11月14日受理)